

地方創生：プレイスメイキングを活用した福山スポーツビジョン2020
～2020年オリンピック・パラリンピック東京大会を契機として～

福山大学 相原ゼミ

島田 誠也 大江 羅夢 廣田 光弥 坂本 倫子 晋川 賢也
和田 健太郎 清家 将徳 阪本 惣二郎 熊上 達也 大野 真寛

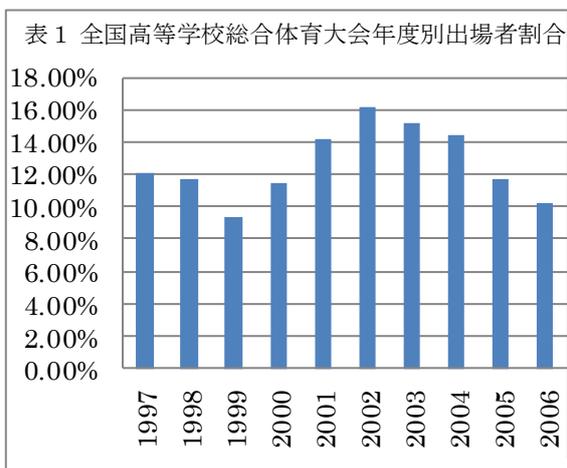
1. 緒言

2020年、オリンピック・パラリンピック東京大会の開催が決定し、121万人の雇用創出と19兆4000億円の経済効果が期待されている¹⁾。開催都市である東京だけでなく、地方都市もオリンピック・パラリンピックの事前合宿を誘致しようと必死だ。地域のメリットを大きくPRし成功すれば、多額の経済波及効果を生み出すことができるだろう。また、青少年の競技力向上やオリンピック・ムーブメント推進などの国際理解教育においても多大な教育効果が期待できる。地方都市にとって経済・社会効果を創出できるまたとない契機である。

しかし、現状として日本の人口が今後20年間に1400万人も減少する中で、地方都市における人口減少は避けられない。さらに、2040年に896市区町村が消滅する可能性があるとの予測が大きなショックを与え、政府は地方創生の司令塔として「まち・ひと・しごと創生本部」を設置し、2020年までの地域活性化総合戦略を本格的に促進していく。

本研究では、オリンピック・パラリンピック東京大会を契機に街(都市)を活性化し、人口を増加させる可能性を検討した。公共空間の利活用、居住者の心と体の健康、地域への関与、地方での生活価値向上、不動産価値向上させ、福山市を活性化させる地方創生構想を提案したい。少子高齢化の進行する広島県福山市では、2020年までに経済・社会効果を向上させることはもちろんであるが、まずは社会コストを最小限に止める政策を考えるべきだ。生活習慣病に起因する医療費は、国民全体で年間9兆円に達するため、スポーツを活用し、医療費を削減することは有効だ。

2. 福山市におけるスポーツの現状と課題



出典：福山市スポーツ振興基本計画

福山市の現状として、福山市教育委員会の「福山市スポーツ振興基本計画」²⁾の一部である。表1は、1997年～2006年まで29競技の福山市関係全国高等学校総合体育大会年度別出場者数割合である。この図から、屋外競技と比べてみると室内競技の割合が低いことが分かった。このことから、何か出場者の割合を下げている原因がある

のではないかと考えた。そこで、福山市のスポーツ施設を目につけた。福山市の設置状況は、社会体育施設が37個、他の公共スポーツ施設が8個の合計45個のスポーツ施設があった。このうち室内競技に使われる施設は13個しかない。この現状では、室内競技のレベルは落ちる可能性が高い現状と考えられる。

福山市民がスポーツを行うときに不便に感じることは、世代別の差はあまりなく、「場所・施設がない」「時間がない」「費用がかかる」の3大要素が上位を占めている。施設数が少ないことから、福山市では2013年に閉鎖した福山競馬場へ新しいスポーツ施設を建設することを視野に入れることにした。福山競馬場は全体の面積が154.185㎡あり、この大きさは東京ドーム3個分の広さを持つ。そこに大型総合体育館を建設し、新設された施設を学生や市民の方々が使用することにより、競技者人口増加、競技力向上、福山市民全体の医療費削減につながる。

3-1. プレイスメイキング

まず、「プレイスメイキング (Place making)」とはすべての人間が今住んでいる場所の中に自身を発見できる場所に変えていく方法である。プレイスメイキングの中でも注目されているのがサードプレイス(Third place)だ。サードプレイスとは、米国の社会学者 Ray Oldenburg(レイ・オルデンバーグ)が提唱した概念で³⁾、第1の場所(ファーストプレイス)である家。第2の場所(セカンドプレイス)である職場や学校、その両者を結ぶ中間の第3の場所を指し、都市居住者にはこの3つの居場所が必要であるとしている。オルデンバーグはカフェや書店、床屋などの店舗にサードプレイスが多い理由として、買い物客と周辺住民が情報交換する交流の場となり易いためとしている。住民が情報交換する交流の場となり易いためとしている。サードプレイスは、皆の居場所であると同時に、個人のプライベートな「まちなかのお気に入りの居場所」であるとも言える。近年、わが国では、これ

らの店舗が減少するにつれ、住民や来訪者は、精神的な拠り所を失い、まちへの愛着も減少していくことにより、まちが衰退していくことが危惧されている。プレイスメイキングという手法を試行して、サードプレイスづくりを学生や住民、行政の協働で行うべきである。(図1)

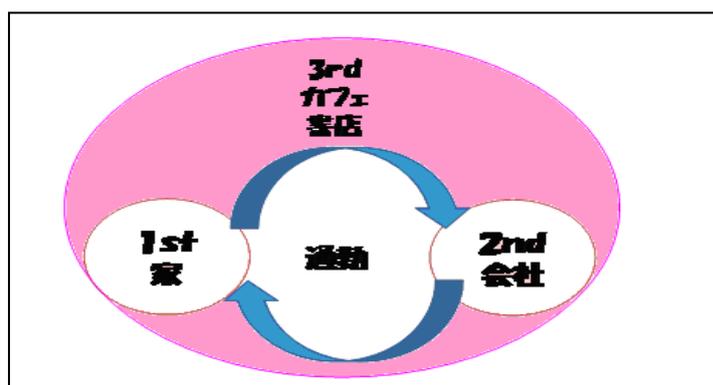


図1 サードプレイスの概念

3-2 プレイスメイキング 米国の実践例

実際にサードプレイスを実践している米国の事例を述べる。プレイスメイキング(使え

る場所)の考え方は日本と米国で大きく異なる。日本の場合、公園・緑地や道路における活動に禁止事項が多く活用方法が少ない。米国アーバイン市ウッドブリッジでは、人工湖や周囲を回遊可能な約10kmの遊歩道。市全体が取り組んでいる場所では150kmを自転車で回遊できるレクリエーション回廊を使って、週2回のフリーマーケットに自転車で訪れるなど健康にも一役買っている(図2)。アメリカでは医療・健康保険が高いため、こうした空間作りと町並みの景観でストレスを減らし、くつろげる居場所は欠かせない。また、米国ニューヨーク市「ブライアントパーク」では、約4500脚の可動式イスを設置し、6ヶ所の飲食店を経営しておくことで勝手に人が集まり、犯罪多発地区であった公園を賑わいのある公園に変えたのはプレイスメイキングそのものである(図3)。中心市街地と近郊住宅地でも街中に能動的にとどまる居場所を増やす再生策で治安を改善することができた⁴⁾。米国でみられるこのような状況は、日本での現代的な課題である公共空間の利活用、居住者の心と体の健康、地域への関与、地方での生活価値向上、不動産価値向上において、多くの示唆を含んでいる。



図2 アーバイン市「ウッドブリッジ」



図3 ニューヨーク市「ブライアントパーク」

3-3 プレイスメイキング 福山競馬場跡地構想

現在、広島県では、高齢化が進む国内だけでなく、グローバルでも市場の成長力がある“医工連携”を支援している。かつて地場産業である金属加工や造船、自動車関連技術を基に新しい企業、産業が興ったように、地元企業の技術を応用して、成長が期待される医療・福祉ビジネスを創出していこうという医工連携の動きが県内で広がっている。

福山市では、環境、健康、農林水産業、観光の4つの重点分野を成長産業と位置付け、総合戦略を立案していく。超高齢化社会の理想的な姿(ショーケース)を発信するというのも、2020年の日本の都市の役割である。自民党のIT戦略特命委員会が提言した「デジタル・ニッポン2014」⁵⁾では、2020年に向けたITイノベーションで「おもいやり、おもてなし、おせっかい=トリプル“O”」をコンセプトにしている。このトリプル“O”をコンセプトに福山競馬場跡地は医工連携のショーケースとして、プレイスメイキングしていきたい。その条件として、歩きたくなる歩行性、用途と建築形成の多様性と混合性、公共空間重視と街の小型化された凝縮性が、福山競馬場跡地には加味されるべきである。可能な

らば、福山競馬場跡地は国際特区制度を活用した「医工連携ショーケース」というプロジェクトで少子高齢化社会の課題解決を目指していきたい。

企業と傘下の健康保険組合は高齢者への医療費負担で財政が悪化している。企業や健保は社員や加入者の病気予防に注力し医療費を抑え健保財政改善を目指し、健やかな仕事環境を提供ししていく。レセプト（診療報酬明細書）と健康診断データを一元解析する統合データベース開発や運動・健康予防施設として活用されるべきだ。跡地の使用方法は、借景が良くWi-fi設備のあるカフェ、回廊スペースにはおが屑を敷き詰めたランニングコース、環境問題に配慮したゴミ箱の設置。チームプレイのアスレチック器具などを取り揃え敷地内に点在させ地域および近隣の合宿地や、野外教育を实践したい。体育館ではLEDコート、福山の名産品であるバラをモチーフにしたバラ色のシートを設置する。総合型地域スポーツクラブでは子供から親への逆世代教育「がん予防の授業」（バイエル薬品）ができるような、託児所などの子育て支援にも注力したい。JFEの鉄やスタジオ・ジブリ作品「崖の上のポニョ」などを含めた地域資源を活用したオブジェを作成するなど、地域に特化したプレイスメイキングな空間を構築したい。福山競馬場跡地に隣接する芦田川の水辺空間や“サイクリストの聖地”である「しまなみ海道」（尾道市）とともに協働していきたい。

4 おわりに

米国アーバイン市ウッドブリッジのような空間が、福山競馬場跡地に完成したからと言って、すべて完成するわけではない。持続可能な街づくりを目指すには、常に進化しなければならない。スペイン・バルセロナにあるサグラダファミリアのように未完成な状態でも、利活用な公共空間を維持できる存在になるべきだ。日本政府の成長戦略やビジョンは2020年に向かい着々と進展している。今回のオリンピック・パラリンピック東京大会はグローバルに情報発信し誘客する絶好の機会である。スポーツ・ツーリズム戦略に基づき、地域の観光素材磨き、誘客、情報発信、広域観光、現場主義でツーリズムを展開することは大事である。しかし、2020年がすべてではない。公共空間の利活用、居住者の心と体の健康、地域への関与、地方での生活価値向上、不動産価値向上させることによって、持続可能なショーケースを実現し、人口増加・社会コスト削減・地域創生を実現したい。

参考文献

- 1) 森記念財団都市戦略研究所：「2020年東京オリンピック・パラリンピック開催に伴う我が国への経済波及効果」2014.1
- 2) 福山市教育委員会：「福山市スポーツ振興基本計画」2007.7
- 3) Ray Oldenburg: The Great Good Place, MARLOWER&COMPANY NEW YORK
- 4) 渡和由:住宅地のアクティブなコモン空間」,家とまちなみ 69,2014.3
- 5) 自民党 IT 戦略特命委員会：「デジタル・ニッポン2014」2014.7.2